

幼児教育の課題

津 守 真

するような意見は、世間の趨勢を知らぬ非常識論とされるか、反体制的意見とみなされるようになりかねない。しかしそういう意見は、たいてい、幼児のことをよく知っている人たちから提出される疑問である。

幼稚園にいきたがらなくて、毎朝苦労を重ねている親は、いまこの瞬間にでも、どれだけおおぜいいるかわからない。そのことで、いろいろ手をつくしながら、どうしてよいかわからないでいる先生たちは、またどれだけおおぜいいるであろうか。登園拒否という主訴で児童相談機関にどれだけの子どもが来ているであろうか。こういう子どもたちは、いまの状況だと、何とか適応させなければという方向にいろいろの人が動くであろう。

しかし、幼稚園時代に、幼稚園にいきたがらなくて親や先生を手こずらせた子どもの大部分は、小学校の二年か三年になると、走るかわからない。

最近数年間にわたってとくに論議されている幼稚園の義務化の問題や、最近の中教審の答申をめぐる問題などはその例である。いま直ちに義務教育年齢の引き下げという形で行なわれなくとも、大勢は義務化に向かって動いているであろう。義務化に反対

親や先生もほとんど忘れてしまうくらいに成長している。幼稚園のときに休みぐせがつくと小学校にいってからこまるというたぐいの議論は、結局おとの議論にほかならない。幼稚園教育としては、いかにして子どもが幼稚園にいくことに意味を見出すようになるかをくふうすることが第一の急務である。

幼稚園を子どもが自分のものと感じることができ、幼稚園にいくことが心から満足のいくものとなるならば、その教育は成功したものといえよう。これはなかなかたいへんなことであって、全國に何万とある幼稚園のクラスのことごとくがその条件をみたしうるとはとても考えられない。

幼稚園にいきたがらない子どもはあとを絶たないだろうし、幼稚園にいかない方がよりよい生活になるという子どもも、あとを絶たないであろう。だから、幼児にたえずふれている人たちにとっては、子どもが幼稚園にいかねばならないという状況をつくり出すような風潮には首をかしげたくなる気持がきっと心の一部にあるであろう。義務化の問題は、こういうことを論議の中に十分にいりていかないと、幼児にとってよくなき結果になるであろう。

現在の幼稚園界における知的教育論については、なおいくつかの問題がある。その一つは、早期に知的教育、とくに文字や数の教育を行ない、知的発達を促進させるという考え方である。その議論で重要なことは、早期に促進させられるもののあるところには、そのかけに発達のとめられてしまうものがあることを認識することの必要性である。文字を知らないからこそ、子どもは絵本を見て、とらわれずに想像し空想することができる。未熟な段階

未熟であることの重要性

幼児にとつて一面的な議論の最近の問題として、極端な知的教育導入の論もあげなければならないであろう。本来、知的な面の

はその段階でなければ得られないものがある。未熟ということすらできないのであって、発達の時期はその一つ一つが重要であり、その時でなければみたせないものがある。幼児期には、人間のいろいろの要素が混沌としてはいつているものであって、ことばで分類してしまうことのできないような要素がたくさんある。それだからして、それから後、人間の多くの機能が分化していく母胎となるのである。

多くの可能性をもつた幼児、夢や空想の世界に住んでとんでもないことを考え出す幼児、自分の思ったことを実現するのにエネルギーの出しあしをしない幼児、生き生きとした人間の本来の姿であるような幼児の生活を、幼児教育はたいせつにしなければならない。

過去と未来から解放されて
的つながりができることが前提となる。こんなことはあたりまえで、これは指導上の留意点のまず最初にくるという答えがすぐに出でてくるであろう。しかし、そのことがついになされないままに、幼稚園生活の二年間が終わってしまう子どもがどんなに多いであろうか。現状では保育者が子どもの心としっかりとつながる前に保育者にも子どもにもあまりに多くのことが要求されているのではないだろうか。単元や活動が先行して、保育者が子どもとゆっくりつきあう時間がない。保育者が子どもたちとともに本当に自由になれる時間があまりにも少ないのでないだろうか。しかし、このような人間的交わりが教育の土台なのである。

保育者の側から、日々、幼児と接するときの条件について考えてみよう。保育者が幼児の集団の中にあって、何をなすべきかを考えるときの発想として、その日になすべき予定をしつかりときて実際をすすめることにより、よい教育ができるという考えがかなり根強い力となっている。しかし、このことはもと根本的に立ちもどって考えてみる必要がある。

まず、教育が成立するためには、保育者と子どもの間に人間

成長しようとする心を育てることができない。今までこうしてきたからこうすればいい、ということを原理として、保育者がなすべきことをきめるのではない。保育者はむしろ、いままではこうしてきただけれども、いま前の前の子どもはこうであり、自分はこうするのがよいと思うからこうするという動き方をなすべきであろう。その点で保育においては保育経験は過大視されはならない。また、権威ある説にしたがって、こういう予定を立てているからこうする、という原理で保育者が動くのではない。そうだとすれば、たとえ自分が立てた予定だとしても、その瞬間におけ

る人間の自主性が失なわれるであろう。そのときに子どもはどういう状態であり、自分はどうすればよいと思うかということで、次になすべきことがきまっていく。予定を文字であらわすと、それが固定化する傾向があるから、それだけ、この場にふさわしい動きを妨げることになるであろう。

保育者にとって重要なことは、自分がどうすればよいかということをきめる判断力や想像力や思想を養うこと、自分が容易に動くことのできる身体的技術とこれに伴う精神を養うことである。教育の系統化といって、おとなのかめた目標を軸にして、おとなとの論理と経験で内容を構成すれば、より高度の教育になると、いう考え方は、あまりに直線的にすぎるであろう。

人に示すことのできるような論理的に構成されたカリキュラムをもつていい幼稚園で、先生も子どもも十分に遊んでいるところに、もつと高度の教育的因素があることを見落としてはならない。また、このことを明かにしていくところに、今後の保育に関する学問の重要な課題の一つがある。

最初に述べたように、中央である話題が提供されると、幼児から切り離して空中で議論が回転しはじめる。私どもは、それを児の生活にひきもどし、ひきもどして、幼児にとってそれがよいのかどうかを問わなければならぬ。それを問わずして、中央からの指示があるからという理由で、現代の風潮に流されて変革をしてはならないと思う。

四、五歳と小学校一、二年生を一つの単位とする学校という考えは、日本の現状から切り離して考えれば一つの考え方として認めることはできる。現状において守らねばならないことはなにか。

第一に、幼稚園の遊びを主とする教育を、小学校の方にのばして、小学校の低学年を改革していく方向で考えられねばならない。その逆であってはならない。先導的試行ということにより、現在の小学校の教科主義的考え方が幼稚園教育に逆流することになつたら、日本の幼児の成長に重大な影響をのこすであろう。

第二に、実験として訓練プログラムを幼稚園に導入してみて、その効果を研究するという考え方をとつてはならないと思う。教育の場における実験は、常に、このことが子どもにとつて役に立つものとなつていかなければならない。

第三に、今まで幼稚園から排除されがちだった子どもたちがふくまれていくような方向で考えられねばならない。ちえおくれ、肢体不自由、盲ろうなどの障害をもつ子どもといっしょに生活する場としてこれが考えられていくならば、日本の幼児教育の将来に積極的な意味をもつであろう。

幼稚園の現状にも、親の要求にも、子どもに重荷をかけることの多い現代の社会である。考えるべきことはあまりにも多いが、一クラスの人数がせめて三十人になるように設置基準をかえるなど、手近なところに改善すべきことがまだたくさんあるのではなかろうか。